音曲声出口伝

一調　二機　三声

調子をば機が持つなり。吹物の調子を音取りて、機に合すまして、目をふさぎて、息を内へ引きて、さて声を出せば、声先、調子の中より出る也。調子ばかりを音取りて、機にも合せずして声を出だせば、声先調子に合ふ事、左右なく無し。調子をば機に籠めて、さて声を出だすゆへに、一調・二機・三声とは定むるなり。

　又云、調子をば機にて持ち、声をば調子にて出だし、文字をば口びるにて分かつべし。文字にもかからぬ程の曲をば、顔の振り様を以てあひしらふべし。

毛詩云、

情発於声、声成文、謂之音。

一、音曲の習ひ様、二色にあるべし。謡の本を書人の、曲を心得て、文字移りを美しく作るべき事、一。又、謡ふ人の、節を付て、文字を分かつべき事、一也。文字によりて、かかりになりて、五音正しく、句移りの文字鎖りのすべやかに聞きよくて、なびなびと有やうに、節をば付るなり。さて、謡ふ時は、その曲を能能心得分けて謡へば、曲の付様・謡ひ様、相応する所にて、面白き感あるべし。

　然ば、ただ、節の付様を以て、謡の博士とす。文字移りの美しく、清み濁りの曲に似合ひたるが、かかりには成なり。節は形木、かかりは文字移り、曲は心也。凡、息も機も同じ物、ふし・きよくと云も同じ文字なれども、謡ふ時は、習ひ様別なり。稽古云、「声を忘れて曲を知れ、曲を忘れて調子を知れ、調子を忘れて拍子を知れ」と言へり。

又、音曲を習ふ条条、まづ文字を覚ゆる事、其後節を極むる事、其後曲を色どる事、その後声の位を知る事、その後心根を持つ事。拍子は初・中・後へ渡るべし。

一、曲に訛る事。節訛りは苦しからず。文字訛りは悪し。文字訛りと申は、一切の文字は、声が違へば訛る也。節訛りと申は、てにはの仮名の字の声なり。てにはの字の声は、言ひ流す言葉の吟のなびきによりて、声が違へども、節だによければ苦しからず。能能心得分て口伝すべし。

　てにはの文字の事、は・に・の・を・か・て・も・し、か様の終り仮名の声がすこし違へ共、節のかかりよければ苦しからず。節と申は、大略、てにはの文字の声なり。

惣じて、音曲をば、いろは読みには謡はぬ也。真名の文字の内を拾いて、詰め開きをばてにはの字にて色どるべし。

　　口伝有。平上去入四声、五音合習有。

一、声をつかふ事。声の向きたる時を失はじとつかふべし。声の薬などと申ことも、つかひたる後に薬を飲むべし。是、声のよくなる相なり。

声をつかふ事、其声の向きによるべし。又、気力にもよるべし。横の声をば助けてつかひ、主の声をば押してつかふべし。声につかはれてよき声あり。声をつかひてよき声あるべし。横・主ともにある声を、相音とは申なり。

　宵・暁の事。宵に物数をつかひて、暁はすこし少なくつかふべし。殊更、横の声などをば、暁には、声につかはれて、声をいたはりて、納め声を本につかふべし。返返、声の向きたると思はん時を失はじとたしなむべし。

一、音曲に、祝言・ばうをくの声の分目を知る事。これは、呂・律二より出たり。呂といふは、喜ぶ声、出る息の声なり。律と云は、悲しむ声、入る息と云り。先、根本を心得べき様、かくのごとし。

祝言の声は、機を体にして、機に声を付て出だす声なり。是、強き音声也。呂の声の性根なり。機を張りて強き声は、息を出だす義にあたるべし。是、呂の声、喜ぶ声なり。しかれば祝言也。ばうおくの声と云は、声を体にして、機をゆるく持つ。是、柔らかに弱き心なり。機をゆるく持つは、入る息の心なり。是、律の義、あはれなる性根也。然者ばうをくと名付。

　さるほどに、祝言の声には、機を張るゆへに、調子のかる癖あり。ばうをくは、機をゆるく持つゆへに、調子の下る癖あり。心得べし。

　一、音曲に曲舞と只音曲との分目を知事。曲舞と申は、一道より出でたるゆへに、只音曲には黒白の変り目あり。然者、文字にも「曲」に「舞」を添へたり。惣名音曲と云に、「曲舞」と書たるを以て、別曲ありとは知るべし。

　この変り目と云は、曲舞は拍子が体を持つ也。只謡は、声が体を持ちて、拍子をば用に添へたり。しかれば、曲舞は拍子が体を持ゆへに、「舞」と云文字を「曲」に添へたり。さる程に曲舞と言へり。立ちて謡ふ態也。風体より出づる音曲也。

　しかれば、昔は各別の事にて、曲舞は曲舞の当道にて、あまねく謡ふ事はなかりしを、近代、曲舞を和らげて、小歌節を交へて謡へば、ことにことに面白き也。面白く聞ゆるゆゑに、当時は、ことさら、小曲舞のかかり、第一のもてあそびとなれり。これは、亡父、申楽の能に曲舞を謡ひ出したりしによりて、この曲、あまねくもてあそびし也。白鬚の曲舞の曲、最初なり。去程に、曲舞がかりの曲をば、大和音曲と申付たり。

　かかる程に、曲舞節の硬きを和らげて、小歌節になりゆく所に、曲の道少しづつ違ふ事を、人不知。曲舞にも小歌の曲まじり、小歌にも曲舞がかりあり。しかれども、面白き事肝用なれば、これを僻事とは申さぬなり。さりながら、この分かり目を知らざれば、道を理るべき道師は絶えたるになるべき事、本意をそむけり。

抑、曲舞・只音曲の分目と云は、曲舞は拍子を体に謡ふ曲なれば、文字を拍子が持つによりて、文字も句移りも軽し。又、拍子に引かるるによつて、所所訛る声あり。訛れども、一かかりに聞えて、面白き風聞あり。是、拍子の面白き性根の交るによりて、少し訛る所も、一体のかかりに聞ゆるなり。是を曲舞がかりの風聞とす。

　只謡と申は、拍子にて飾る事もなく、ただありのままに謡ふゆへに、文字の声紛れず。去程に、音曲の髄脳あらはれて、さしごと・ただ言葉よりして、一句・一曲に至るまでも、耳を澄まし、心を静めて、謡ふ人も聞く人も同心一曲の感に応ずる、すなはち是、正しき感也。毛詩云、「正得失、動天地、感鬼神、謂之感」。かく言へるも此感也。しかれば、正しき感なるがゆへに、得失をあらはすと云、身心を驚かす感を、天地を動かすと云、敵を和らぐる所を、鬼神を感ぜしむると云り。しかれば、まことの正風をあらはすゆへに、文字も句移りも正也。

　その内に、上手の態と云ぱ、この正をよく色どる也。正は無文なり。しかれども、上手と申は、この無文の位より、無色の文をのづから出曲す。これを、「声文を成す」と云り。曲はあらはれたる文なれば、有文の文なり。声は無色なるに文をなせる所、是、上手の妙音成べし。無文の文なり。此位を妙所と申なり。

祝言

さしごと　足引の山下水も絶えず、浜の真砂の数積もりぬれば、今は飛鳥川の瀬になる恨も聞えず、さざれ石の巌となる喜びのみぞあるべき、然ば天に浮かめる浪の一滴の露より起り、山河草木恵みに富みて、国土あんせゐの当代也。

下うたう　千代木の風も静かにて、朝暮の雲も収まれり。

上　いざここに、我が世は経なん菅原や、我が世は経なん菅原や、伏見の里は久方の、天照らす日も影広き、みづほの国は豊かにて、たみの心もいさみある、御代のおさめはありがたや、御代のおさめはありがりがたや。

　　　　塩釜

さしごと　陸奥はいづくはあれど塩釜の、うら見てわたる老が身の、よるべもいさや定めなき、心も澄める水の面に、照る月なみをかぞふれば、今夜ぞ秋の最中なる、げにやうつせば塩釜の、月も都の最中かな。

下うたう　秋は中ば身は既に、老かさなりて諸白髪。

上　雪とのみ、積もりぞ来ぬる年月の、積もりぞ来ぬる年月の、春を迎へて秋を添へ、時雨る松の風までも、我身の上と汲みて知る、しほなれ衣袖さむき、浦はの秋の夕かな、浦はの秋の夕かな。

さしごと　鳥は宿す池中の樹、僧はたたく月下の門、おすもたたくも古人の心、今もく前の秋暮にあり。

上うたふ　げにやいにしへも、月には千賀の塩釜の、月には千賀の塩釜の、浦はの秋も中ばにて、松風も立なりや、霧の籬のしまがくれ、いざ我も立渡り、むかしの跡をみちのくの、ちかの浦わをながめむや、ちかの浦わをながめむや。

ただことば　抑この塩釜の浦と申は、入王五十二代の御門、嵯峨の天王の御子融の大臣と申し人、陸奥の千賀の塩釜の眺望を聞し召され、この所に塩釜の形を写し、難波の御津の浦より日ごとに汲を運ばせて、ここにて塩を焼かせ一生御遊の便りとし給ふ。其後は相続してもてあそぶ人もなければ、浦はそのまま干汐となて、池辺に淀む溜まり水は、雨の残の古き江に、落葉散り浮く松の影、月だに澄まで秋風の、音のみ残る計也。されば歌にも君まさで、煙たえにし塩釜の、うらさびしくも見え渡るかなと、つらゆきも詠めて侯。

下うたう　げにや眺むれば、月のみ満てる塩釜の、うらさびしくも荒れ果つる、跡の世までも塩染みて、老の浪も返るやらん、あら昔恋しや。

上　恋しや恋しやと、したへども願へども、かひもなぎさのうら干鳥、音をのみ泣くばかり也、音をのみ泣くばかり也。

ばうをく　　小町

ただことば　朝に一鉢を得ざれども求むるに能はず、草衣夕のはだへをかくさざれども補うに便りなし、花は雨の過ぐるによて紅まさに老たり、柳は風あざむかれて緑漸垂れり、人更に若事なし、終には老の鶯の、もも囀りの春は来れども、昔に帰る秋はなし、あら来し方恋しや、あら来し方恋しや。

上さしごゑ　この二歌は父母として手習人の始と成て、我等ごときの庶人までも、すける心に近江の海の。

上うたう　さざ浪や、浜の真砂は尽とも、読ことの葉はよも尽きじ、青柳の糸絶えず、松の葉の散り失せぬ、種は心とおぼしめせ、たとひ時うつりこと去とも、此歌の文字あらば、鳥の跡も尽きせじや、鳥の跡も尽きせじや。

此条条、世阿歟心曲に及所、私書也。外見不可有者也。

応永廿六年六月日　　　　　　　　　　　　世阿　在判